

はじめに

兵庫県森林動物研究センター（以下、研究センター）は、ワイルドライフマネジメントに係わる研究成果を実務に有益な知見として野生動物の保全と管理に関わる業務を行っている行政担当者や実務者、技術者、研究者などへ提供することを目的に、平成 20 年度から「兵庫ワイルドライフモノグラフ」を刊行してまいりました。今回、第 13 号として特集「兵庫県におけるニホンザル地域個体群の管理と今後の課題」6 編を収録しました。

兵庫県のニホンザルの特徴は、近隣の三重県や滋賀県に 120 群を超えるニホンザルが生息しているのに対し、野生群が 4 地域に 11 群、餌付け群が 2 地域に 3~4 群と小規模な群れが孤立して分布していることがあげられます。それにもかかわらず、群れが存在するそれぞれの地域では農作物被害や生活環境被害が発生しており、被害を軽減させつつ群れの保全も図るための難しい管理が求められています。

そのため研究センターでは、加害レベルと群れの規模による捕獲方法の選択やさまざまなモニタリング手法の開発と実施、監視員による対策、サル用電気柵（おじろ用心棒）の普及、問題個体の除去などによって、群れ数を維持しつつ、農業被害を 1997 年度のピーク時から 20 年後には一割に減少させることができました。

樹上性のニホンザルは、鎌倉時代の 13~14 世紀には開墾可能な平地での開発がほぼ終了して森林の伐採も進んだため、中世になる頃にはすでに奥山に生息する動物になっており、その状況が 1960 年代の燃料革命まで継続していたと考えられています。その後、全国的な分布の拡大と生息数の増加が生じ、今日では身近な野生動物となりましたが、わずか数十年のできごとです。一方、兵庫県では、近世までのたたら製鉄のための森林伐採に加えて捕獲圧がかかったために、小規模な群れが孤立したと推測されます。

国は、ニホンザルの管理方針として、加害群の状況に応じて全頭捕獲や加害群れの個体数削減などの捕獲を進め、追い上げや侵入防止等の対策を並行して実施し、10 年後（平成 35 年度）までに加害群の数を半減させることを目指すことを掲げています。しかし、兵庫県の事例から、加害群が存在する限り被害は発生し、加害群の個体数管理と保全および被害防除を並立するという難しい舵取りが求められます。本特集号からその加害群の削減政策の次の一手に繋がるヒントを読み取っていただくと幸いです。

最後になりましたが、「兵庫県ワイルドライフモノグラフ」は、編集委員が毎年設定するテーマに沿って執筆される論文等をモノグラフとして編集しております。皆様の投稿をお待ちしておりますので、詳細などについては投稿規定を参照してください。

兵庫県森林動物研究センター所長 梶 光一

1) 渡邊邦夫・三谷雅純 (2019) 日本列島にみる人とニホンザルの関係史 —近年の急激な分布拡大と農作物被害をもたらした歴史的要因— 人と自然 Humans and Nature 30: 49-68

「兵庫県におけるニホンザル地域個体群の管理と今後の課題」

目次

第1章	サル群管理に関する環境省ガイドラインの概要と 全国からみた兵庫県のサル管理の位置づけ 滝口正明・山端直人・森光由樹	1
第2章	兵庫県におけるニホンザルの管理政策の概要 池田恭介・山端直人・森光由樹	13
第3章	兵庫県のニホンザルによる農業被害とその対策の群れ間比較 山端直人・森光由樹	28
第4章	ニホンザル群の存続可能性分析の再検討ー捕獲が与える影響 高木俊・森光由樹	44
第5章	兵庫県北部に生息するニホンザル城崎A群の行動圏 および集落出没状況とその要因 森光由樹・加藤貴士	56
第6章	広域連携によるニホンザル管理の効率化 ～大丹波地域サル対策広域協議会の取り組み～ 鈴木克哉・森光由樹	71
附録1	兵庫のニホンザル	84
附録2	ニホンザルの被害防止	88
附録3	サルに有効な電気柵	92
附録4	集落の放置果樹対策	94
附録5	大丹波地域サル位置情報配信システム	96
附録6	ニホンザルの性・年齢クラス判別の基準	98